

西心寺（川島町）

西心寺は、川嶋山と号する真宗大谷派の寺院です。元和元年（1615）の創立と伝われます。本堂と山門が国登録有形文化財となっています。山門は明治36年（1903）の建立で、丸柱（主柱）の前後後に角柱（控柱）を建てる四脚門です。彫刻による装飾も豊かで、近代における伝統的寺院建築の好例です。



山門▶
様々な彫刻で装飾
されています。



ほん だう

本堂

構造形式：桁行9間、梁間7間半、入母屋造、棧瓦葺

江戸末期の中型真宗本堂の典型で、改造も少なく当時の姿をよく留めています。棟札により天保6年（1835）に再建されたことがわかります。この時の棟梁は老親として岡田五左衛門尉源之昌（8代目五左衛門）、當親として岡田米治郎源宜亮（9代目五左衛門）、願主は太田佐兵衛茂民でした。岡田五左衛門は三河を拠点として活動した堂宮大工で、彫刻木鼻や臺股の意匠に岡田大工の特徴がよく表れています。

太田佐兵衛は川島の材木商で、天明8年（1788）の京都大火で焼失した東本願寺本堂の再建において建築材を調達したことにより財を成し、幕府の御用材木も請け負ったといいます。文政6年（1823）、本山が再度焼失した際にも木材調達に貢献し、この時の余材などを西心寺に寄進し、本堂再建の願主となったようです。



▲ 外観（東から）

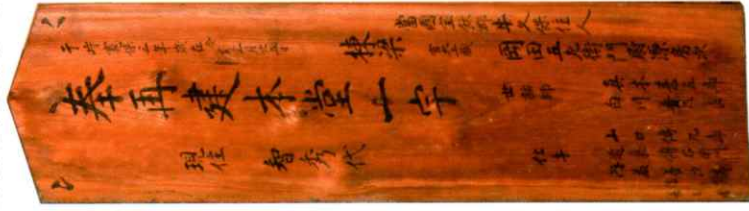


▲ 内観（東から）

矢来内正面の大虹梁、余間仏壇と脇仏壇の正面幕板に縮み奎のトチノキを使用しています。こうした木材を使用する例は他になく、願主の太田佐兵衛が当地の有力な材木商であったことから、このような銘木や良材を使用できたのでしょう。



▲ 矢来内正面 大虹梁



▲ 棟札

掲載されている建造物は、個人や私的団体の所有物です。見学の際は、所有者の承諾を得たり、ゴミは持ち帰るなどマナーを守るようお願いします。

安城市歴史的建造物NEWS Vol.8

令和6年3月発行
安城市教育委員会生涯学習部文化振興課文化財係
編集・発行 〒446-0026 安城市安城町城堀30番地

安城市では、歴史・文化の一部である建造物の記録を残し、後世に伝えていくため、市内の近世・近代を中心とする歴史的建造物について、実態を把握するための調査調査を行っています。また、開発にともない取り壊される建造物の緊急調査も並行して行っています。

旧神谷家住宅主屋
稲垣家納屋
白山媛神社
神明社小河天神社合殿
西心寺

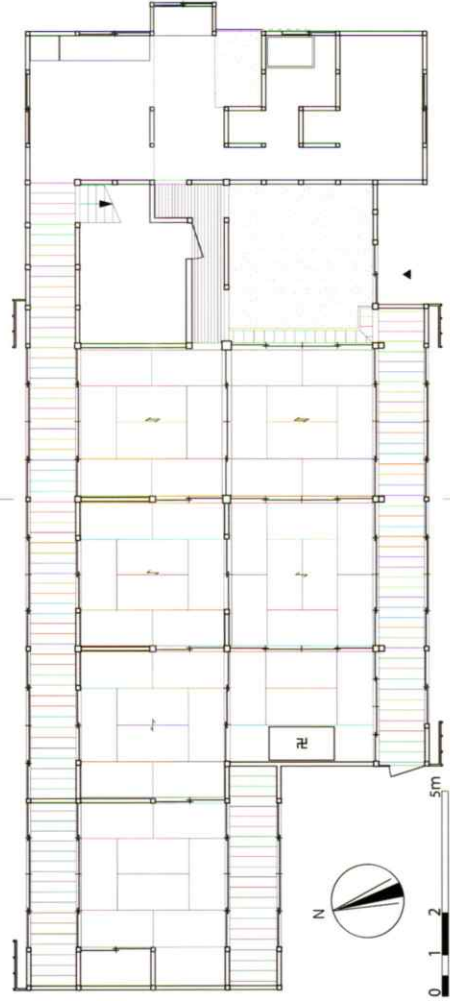


旧神谷家住宅 主屋（野寺町）

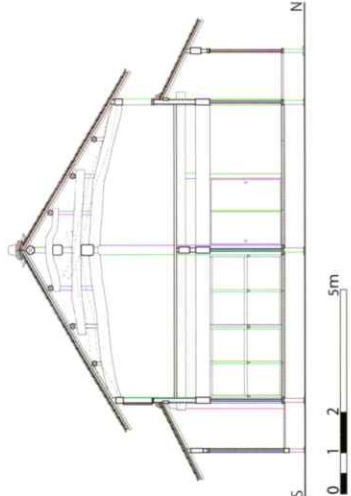
旧神谷家は、大正9年（1920）建造の農家住宅で、本證寺（真宗大谷派）の南に所在します。

木造切妻平屋建てで一部ツシ2階を設けています。屋根は棧瓦葺、東西桁行7間半の土屋の東に切妻屋根で下屋棟を2間延ばします。西面北寄りに切妻で角屋を3間延ばしています。

平面は、四間取りの奥に六畳間の仏間室列を追加した六間取りで、上屋東妻に下屋で土間を広げて水回りを設け、西妻に角屋で八畳間を加えています。敷居中で調整した5尺8寸の畳割りによる内法制で、柱間寸法は計画されています。仏間は上段として長押を廻し、天井は格天井を張っています。



▲ 平面図



▲ 断面図

▲ 外観（南から）



構造形式：木造平屋建、間口125間、奥行き5間、切妻造、棧瓦葺

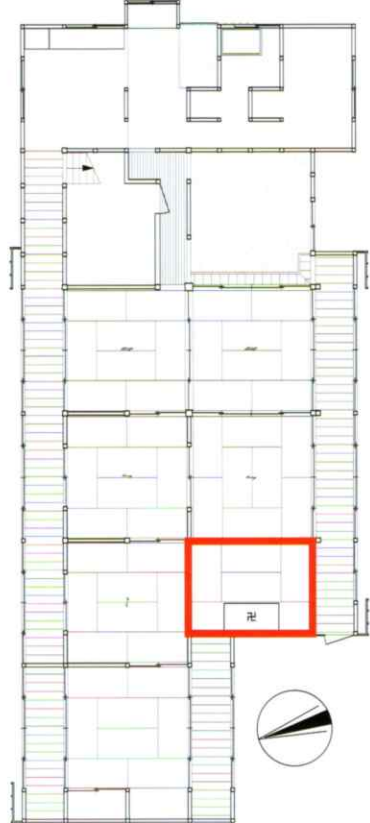


▲ 内観（南東から）



▲ 内観（東から）

安城をはじめとする西三河平野部の真宗が浸透した地域では、整形四間取りで西南の室を仏間とし、仏壇を構え、床の間や違い棚といった座敷飾りを設けない例が多く存在します。幕末・近代には、六畳間や八畳間を西妻に付加して仏間を拡げ、時には床を上段に構え、あるいは天井を格天井とするようになりま



す。説教師を招いた「法座」は、南面室を一体として開催されたといえます。仏間が充実した六間取り平面も、このような信仰を背景に成立したものと考えられます。

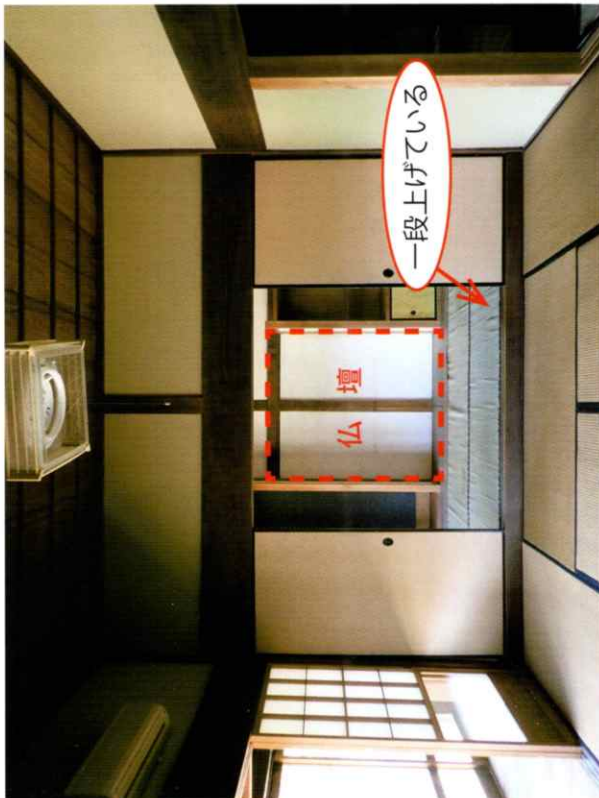
旧神谷家住宅主屋は、このような上段仏間を設けた六間取りが定型化した近代西三河農家の典型例であると言えます。



▲ 仏間 格天井

格天井にすることで、家の中で格式の高い場であることを示しています。本例は造作が新しいため、昭和期に天井を張り直したとみられます。

※格天井とは、格子状に組んだ木の上に板を張った天井です。



▲ 仏間（東から）

仏間は上段としています。真宗が盛んな西三河に多い様式です。尾張など他の地域には、仏間を一段上げている住宅は少ないです。

三河地震の記憶

三河地震は、昭和20年（1945）1月13日午前3時38分頃に発生しました。碧海郡では、旧明治村と旧桜井村で、特に旧明治村大字和泉・同村大字城ヶ入・旧桜井村大字藤井で甚だしい被害が生じました。断層に近い藤井では、家屋が直下に潰れることなく、鴨居や上敷居のはまった所から柱が折れ、横に倒れたようです。鴨居を用いた堅固そうな家がほとんど倒れ、実に9割以上の家屋が全壊しました。藤井に隣接する野寺でも、大きな被害がもたらされました。

この旧神谷家でも、三河地震の痕跡が複数確認できます。柱数本に割れが見られます。割れがあるのは、やはり差鴨居のホゾ入れ部分です。床下の地面にも亀裂が生じています。



▲ 北側床下に生じた亀裂

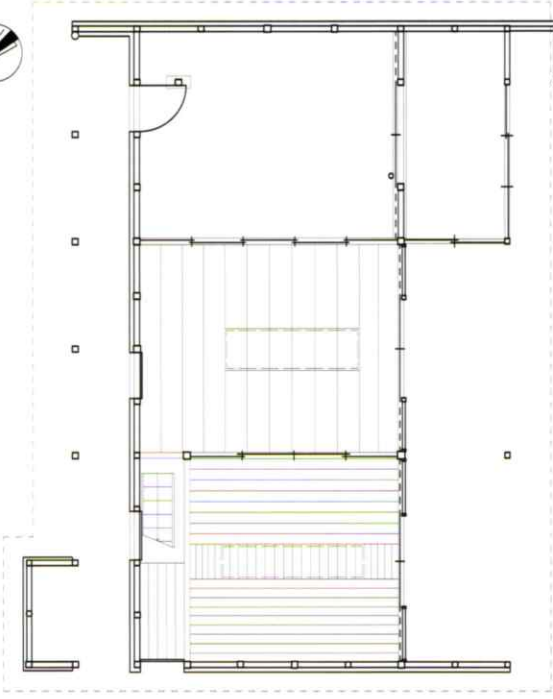


▲ 差鴨居のホゾ入れ部分に生じた剪断

しかし、大地震を乗り越え、今日まで元の姿をとどめたまま建つこの建物は、安城にとって重要な歴史の語り部と言えるでしょう。

構造形式：木造平屋建、間口6間、奥行き4間、切妻造、棧瓦葺

と9。小屋裏で兄づかつに裸れによると、明治24年（1892）に棟上のカマヤビによつて9。



▲平面図

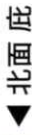


2間巾の両脇半間を土壁の戸袋として1間巾の引き分け戸とする形式は、近世民家に見られる古式な構成です。



▲棟札

明治貳拾四年 大工 西加茂郡明越村 同郡達妻村
大字明越知 大字十足村
小野田貞助 鍛冶
本納棟上御神祭木 挽 御邊澤宮井村 屋敷重助
澤邊幸平 井村大字高木
戸主 船越佐吉
船越幸太郎
旧正月廿八日 同祭於壬午十一月八日始祭



露出する木材全面に、土が厚く塗り込められています。

旧神谷家は、大地震を乗り越えたと同時に、近代において日本デンマークとして発展した安城を支えた農家の暮らしを伝えてくれる、貴重な遺構です。今後皆さまに安心して旧神谷家を見学・使用していただけるよう、耐震工事等を実施する予定です。

が去った後、大正期に旧神谷家が建てられました。

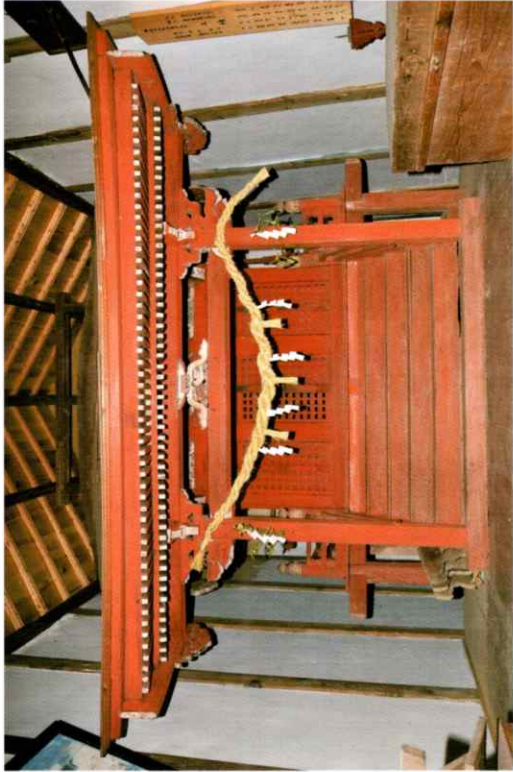


また、稲垣家納屋の西面妻と北面庇の桁や垂木、野地板には土が塗り込められています。これは、貞印寺の火災を目の当たりにしたことから、防火のために外側の燃えやすい部分に土を塗ったと考えられます。

白山媛神社（上条町）

創立は不詳ですが、徳川家康の祖父である松平清康が大永三年（1523）に安城城主となり、白山神社（大岡町）・桜井神社（桜井町）・白山媛神社の三社に社領を寄進して、「三河三白山」としたと伝えられます。以来、徳川14代家茂の代まで社領寄進がつづきました。本殿は一間社流造、銅板葺、二軒繁垂木とし、建造時期は記録が無く不明ですが、様式からみて江戸中期頃（17世紀中頃）と推測されます。庇は江戸後期に改造されています。

摂社 神明社 本殿



▲ 正面（南から）

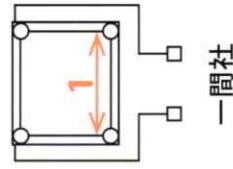


※拳鼻は、木鼻の一種です。木鼻とは、「木の端」が転じた名称で、柱に差した部材が飛び出た部分を彫刻で加工したことに始まりました。時代が降るにつれ、独立した装飾部材として獅子や象など、様々な木鼻が作られています。

本殿の規模

本殿の規模は、正面の柱間の数であらわします。柱間が一つなら一間社、二つなら二間社、三つなら三間社、となります。「一間社流造」は、柱間一間の流造形式の本殿、という意味になります。

【本殿模式図】



一間社

二間社

三間社

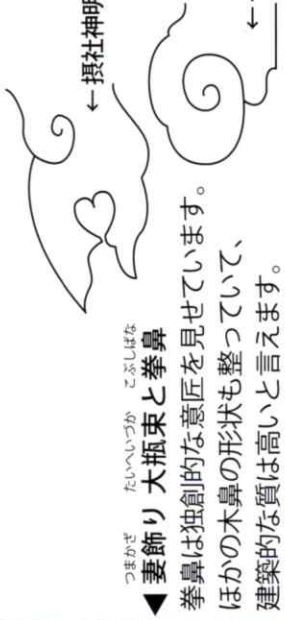


▲ 本殿 外観（南東から）

構造形式：三間社流造、野地板露出（もと檜皮葺ないし柿葺）、二軒繁垂木

神明社本殿の建立に関する不明ですが、様式からみると白山媛神社本殿よりもさらに古式で、家康が神光寺の開基米津盛園を当社の別当職としてとされる慶長8年（1603）頃に遡る可能性があります。現在の白山媛神社本殿が江戸中期頃の建造と推測されるので、その際に前身本殿を西側へ遷座して現在の神明社本殿としたのではないかと考えられます。もしかしたら、家康に由来する本殿でもあり建立後60年程しか経っておらず破却することは躊躇されたことから、神明社本殿として残したのかもしれない。

※神光寺は、白山媛神社の西方にあります。もとは神社に付属して建てられた寺院です。



← 摂社神明社本殿の拳鼻

妻飾り 大瓶束と拳鼻

拳鼻は独創的な意匠を見せています。ほかの木鼻の形状も整っていて、建築的な質は高いと言えます。

← 一般に見られる拳鼻

神明社 小河天神社 合殿（小川町）

創建は不明ですが、『三河国神名帳』にある小河天神とされます。古くは現在地より東方の集落内（字古宮）に鎮座していましたが、江戸初期に神明社が鎮座した現在地に遷座・合祀されたと伝わります。明治維新前には単に神明社と称していましたが、由緒から小河天神社でもあることが明らかであるため、明治9年（1876）に現社号となりました。



本殿

明治25年（1892）の再建です。現在は銅板葺ですが、『桜井村史』（昭和18年）によれば当初は檜皮葺であったことがわかります。四周に簀子縁を廻らし、内転びのある榎持柱を掘立柱状に立てる点や妻の椽首組に鏡形木を組む点は伊勢の神宮にみられる神明造に極めて近いです。また偶数の堅魚木、内削ぎの千木、京呂組の架構などは内宮正殿の形式を踏襲しています。

※明治後期頃から神明造が全国に普及しますが、伊勢の内宮・外宮の正殿は「唯一神明造」と称され、他社が細かな意匠まで神宮と一致することは禁止されました。

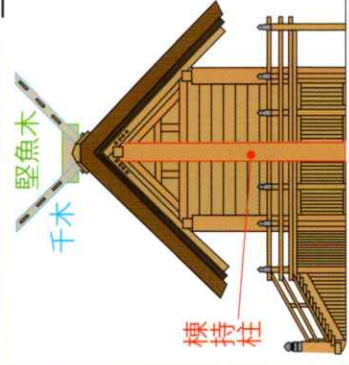
外観（南東から）▲



構造形式：三間社神明造、銅板葺、一軒疎垂木

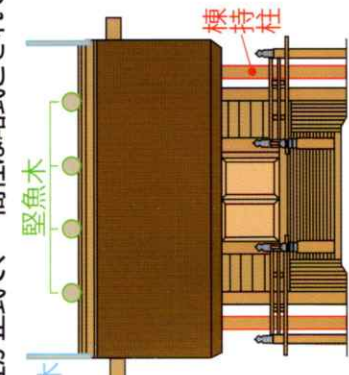
本殿の形式

神社本殿の形式は様々あり、安城で見られる本殿形式の多くは神明造と流造です。どちらの形式も三間社が正式で、一間社は略式とされています。安城では他に春日造などの本殿形式がみられます。



【神明造 / しんめいづくり】

日本古来の神社に用いられていた形式。屋根は前後対称直線的なもので、両側には棟木を受ける「榎持柱」が立っています。



【流造 / ながれづくり】

屋根が前方に曲線を描いて伸びます。現在、神社建築で最も多い屋根の形状です。